

屋久犬

山本秀雄

屋久島にむかし「屋久犬」と呼ばれた狩猟犬がいたことを、島の人は忘れようとしている。

私はかつて古書店で「屋久犬」の記事を立ち読みしたことがある。『鳥獸集報』であつた。帰島したら「屋久犬」の調査をもとと思いながら、当座こそ一、三の聞き取りをしたもの、いつか打ち忘れていた折に、本年一月、懇意の古書店から「屋久犬」掲載誌が送られてきた。

農林省林野庁編集発行『鳥獸集報』(第十五卷昭和三十一年十月第一号)で、林野庁造林保護課白井邦彦氏の「屋久島の野生鳥獣相及び屋久犬」なる論文が收められている。内容は、

- I 緒言
- II 地理
- III 植物景観
- IV 調査方法

V 本論

1 鳥類

A 新記録の鳥類

B 棲息密度

C 垂直分布

D 植物帶と鳥類との関係

E Regionの問題

2 哺乳類

A 新記録の哺乳類

B 記録種の概説

C Regionの問題

3 屋久犬

A 形態及び特徴

B 現勢

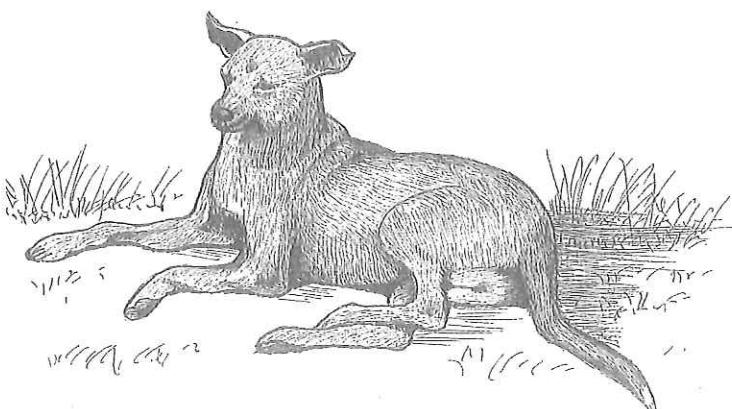
C 使途

あとがき 摘要 附表 参考文献

同書によれば既に純系統はないありますが、「屋久犬」のためにも、狩猟史のためにも、「屋久犬」のその後を知りたいと思っています。情報をお寄せ下さるなら幸甚に存じます。

連絡先||生命の島編集部

以上の通りであるが、今度こそ忘れてなるまいと、本誌にお願いし、さわりの部分を抜粋して紹介する次第です。



屋久犬

A 形態及び特徴

た。

体高 45~50 cm
体長 50~55 cm

体形 稍長方形。四肢は細く且つ長い。一見して軽快なtype [型]である。

頭頸 頭蓋は広く、吻は鋭い。
stop 「犬の鼻口部と頭の上部間のくぼみ」は浅いが明瞭である。頸は細く長い。

耳 概して大きく、且つ薄い。立耳であるが、緊張度に乏しく、先端稍下垂の傾向である。両耳間の角度は大である。

目 三角形で切目は長く、釣目である。

尾 太く長いが、概して弾力に乏しく、差尾である。

体毛 上毛は頗る短小であるが、剛直であつて、総体的に看ると平滑である。下毛は発達しない。尾及び頸側の毛は稍長く、外方に開張氣味である。

本島に渡島した筆者は、先ず外観的に優良なもの同士を比較し、各々の相似点を extract [抽出] して総合した。次いで、各々の飼主たちの説明を参考にして、これを修正し、次のような標準を作成し

以上を要するに、屋久犬は、日本犬中型と日本犬小型の中間のtype [型]であり、別の区別を以てすれば、鹿犬のcategory [範疇]に編入せしめらるべきものである。但し、社団法人日本犬保存会の、日本犬標準に照合すれば、可成り特殊な存在である。

その原因を案すれば、(1)本島が海洋を以て他の陸地から isolate [隔離] されていること。(2)本島の面積が極く狭少であり(50,000Ha)、本犬の棲住固体数の僅少から、短時間に強度の inbreeding [近親交配] がくり返される運命下にあつたこと。(3)面積の狭少は外因の地方差を少くし(本島は、垂直的に見れば、諸種の異なる環境を包蔵するが、部落は殆んど海浜近くにあり、犬は其処に飼育せられるから、外因の地方差は殆ど考慮の余地がない)、この事実が彼らの differentiation [区別] に、一つの指向性をもたらしていると思はれること。(4)本島に於ける、本犬の使途が、本犬に対し、かなり強度の artificial selection [人為的淘汰] を喚起したもの。等によつて、急速に特殊化したものと考えねばならぬ。

B 現 勢

本犬は、本島の部落に伴つて存在するが、特に下屋久村安房・同尾之間・同栗生、上屋久村宮之浦・同長田の諸部落に概して数も多く、優良なものを発見する。但し、その密度は決して濃くはない。本島には、畜犬乃至獵犬の団体はなく、研究者も居ない。また、この犬の保護を講ぜんとする篤志家も見当らない。従つて各々の犬の血統は、その飼主達が、夫々その父母犬乃至祖父母犬位を、記憶に留めている程度であつて、先ず“不祥”的取扱いをせねばならない。これは一つの痛恨事であるが、より筆者をして落胆せしめたのは、本島が離島であり乍ら（否、寧ろ離島なるが故に）、大部分雑種化されて居り、一瞥の印象を以て、純系に近いと判断されるものが、ほとんどなきに等しかつた点である。これは申す迄もなく、放任的飼養のために、内地から渡島した諸犬種や雑種犬と交雑した結果であるが、別に、多少計画的に交雑された点が著しい。次節に於いて、筆者は、本島に於ける本犬の使途について説明するが、

一部の狩猟家がより高性能の犬を作出する目的で、その感覚に於いて、将又機能において、万犬に卓越する作業犬と呼号せられた、かのshepherd〔シェパード〕に着目して、これと交雑させ、偶々出現した高性能のF1に眩惑させられ、一時これがもてはやされたのである。現在、本島の老練な狩猟家たちは、この、かつての軽拳を悔んでいるが、後悔先に立たずの感、転た筆者の脳裡をかすめる。

実に、無念というもおろかであるが、こうして壊滅の一歩手前にある彼らを、今、改めて世に紹介せんとする企では、一は、滅びゆく本犬の、最後の記録を残さんがためであり、一は、救いの手の差伸ばされんことを、世に訴えんがためである。

何故に筆者が、本犬のために、かかる切実な思いを寄せ、貴重な公刊物の頁數を増さんとするかは、本犬の使途に対する、その能力の優良さに、瞠目させられたからに他ならない。

茲で筆者は、本島における狩猟の実態を、再び語らねばならなくなつた。本島に産するヤクシマジカ *Cervus nippon yakushimensis* KURODA et OKADA が、いかに小型の鹿であるとはいへ、内輪に数えても一〇〇〇頭を越ゆるという、その捕獲高は、副業としての狩猟を成立せめるのである。その獲得された肉は、一部塩漬けで内地に向う他、大部分は島内で消費されるが、頭骨は一頭分五〇〇円

C 使 途

本島に於ける、本犬の使途は、家庭の

一五〇〇円の高値を呼び、皮は三五〇円（一〇〇〇円の価格（何れも一九五〇年現在）で、主として関西地方の商人に引取られるのである。従つて、漁業と極く僅か行われる農業の休閑期に、各々の生業として、狩猟に従事する、本島の狩猟家は、優良な犬の養成と獲得に努め、真剣な猟を展開するわけである。

ところで、その猟法は、本島が一般に密林であることと、鹿が小型であることのために、時には銃器の他、鹿の退路に罠や罠も併架し、一方では、猟犬自身に咬み伏せるようにしむけて、能率を上げる方針をとつてゐるから、確實且つ迅速に鹿を追跡し、これを窮地に追いこんで、独力で咬殺する犬を以て、理想としているのである。優良な犬は、さつさと鹿を斃して、早速引き返し、主人の足跡を伝つて迎えにくるという。

筆者は、本島の下部zone〔地帯〕において、また、宮之浦岳の略々頂上に向つて登り乍ら、三頭の犬につき、各種の環境下において、それぞれの猟風を観察したが、何れも感覚は鋭敏で、ひとり嗅覚のみならず、聴覚・視覚も混然併用して捜索し、追跡階程に入るや、単に綿密に

鹿の足臭を追隨するばかりでなく、常に獲物を遠方に走らせぬよう、退路の制限を考慮しつつあつたのは、美事なものであつた。従つて、脚は俊足、動作敏捷、追鳴きは高くして、且つ連續的であり、猟者は獲物と犬の所在を知るに、困難を感じなかつた。しかも、自ら鹿を咬み伏せんとする気構えが横溢しており、すべてに於いて卓越せる鹿猟犬と評し得る。

しかし、筆者は、本島における本犬の猟風は、概して特殊であつて、普遍性を欠くと觀た。だが、これは眞にやむを得ない。蓋し猟犬たる、彼の日ごろの猟場と、日ごろの獲物に對してのみ、最大の能力を發揮しうるものであり、獸猟犬にあつては、殊にこれが顯著であること、例外の存在を許さない。特に、本島は、地形急峻にして、沢に降れば生命を保証しないという渓谷が無数に走り、山又断崖發達して至るところ屏風岩を形成し、某人感嘆して名づけた“東洋のマッターホルン”と称する奇峰の存在する如き景観。森林は、或は數米の見通しもきかぬthick forest〔密林〕。さては、直径七八米もある巨大な屋久杉 *Cryptomeria japonica* D.DON の天然林。こうした特

殊な環境下で特殊な訓練をつんできた本島の犬が、獨特の猟風をそなえるのは誠に当然なことであり、さればとて、何等筆者が上に述べて普遍性を欠くと稱したのは、この島で狩り暮らしているものを、その偲、内地の猟場に連行するような輕拳を封する目的と、本島における本犬の猟風が、頗る特殊なものであることを示す目的をのみ持つものである。内地の鹿猟場で鹿に當てる時は、地形により若干相違は生じようものの、能率が落ちる程度で、いざれも使役せられるであろうが、猪の場合、乃至猪の交る猟場で使役した場合は、おそらく彼の牙に遭つて、むなしく斃されてしまうに違ひない。猟用としての、他地方への移出は、必ず未訓練犬でなければならぬ。この場合、筆者は次のことを斷言してはばからぬ。その未訓練犬が、鹿であれ、猪であれ、兎であれ、やがて移入先で、冠絶した作業を行うに到るであろうことを。筆者は彼の高度の稟性、卓越せる感覚と機能に対し、信頼感をいだくものである。実に屋久犬は、ひたすら、獸猟犬として活きてきたものである。